



Title	「体験としての自閉症スペクトラム障害」の描出：対話を研究方法として用いたことを中心に
Author(s)	木谷, 岐子
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 132, 25-44
Issue Date	2018-08-30
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.132.25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/71464
Type	departmental bulletin paper
File Information	030-1882-1669-132.pdf



「体験としての自閉症スペクトラム障害」の描出

－対話を研究方法として用いたことを中心に－

木 谷 岐 子*

【要旨】 本研究論文では、筆者が2017年3月に北海道大学に提出した、博士学位論文を、北大教育臨床心理学講座が培ってきた知識や技術の成果の一つと位置付け、その中に“apprivoiser”すなわち、「絆を創る」ことの重要性がどのように生かされていたのかについて、検討する。筆者の博士学位論文は、当事者の内的体験から自閉症スペクトラム障害を描出することを試みるものであった。調査方法として「自分」という意識の様相を、「対話」によって語り出してもらった。そのために筆者が行った工夫や配慮について改めて検討した。検討の結果として、協力者の語りに内包される本質的な意味を捉えるためには、「対話」に、調査者自身の自己を深く関わらせていく、共同作業としての調査が必須であったことを述べた。

【キーワード】 対話、自閉症スペクトラム障害、内的体験、自己

1. はじめに

間宮正幸北海道大学名誉教授は、教育学部在任中、学部の教育臨床心理学講義を担当した。その講義の試験は、サン＝テグジュペリの作品 *Le Petit Prince*『星の王子さま』から、様々な形で出題されたという。間宮は、この物語が、「実は、教育臨床心理学研究の根本的課題と重なっている」（試験問題より）と考えた。退官前、最後となる試験では、王子さまと狐のやり取りに頻回に使用される“apprivoiser”という言葉を取り上げて出題した。“apprivoiser”というフランス語は、もともとは、飼いならす、という主従関係を表す日常的な意味づけしかなかったという。しかし、絆を創る (*créer des liens*) という新しい意味を持たせたのは、サン＝テグジュペリだとされている（小島、2006）。

「…すなわち“apprivoiser”，時間をかけながら、手なづけていきながら、なじませ、仲良しの関係をつくるということ、このことは、私たちの教育臨床の実践において、どういうふうに生かされると考えますか。」（試験問題より）

筆者は、本論文をもって、間宮が出題した、この最後の試験問題に解答したい。

筆者の博士学位論文を、北大教育臨床心理学講座が取り組んできた研究成果の一つと位置付け、その中に“apprivoiser”の重要性がどのように生かされたのか、という観点で、改めて研究の成果を検討したい。

* 北海道大学大学院教育学研究院専門研究員
DOI : 10.14943/b.edu.132.25

2. ASD当事者の自己とパーソナリティ (personnalité) への関心

筆者は、博士学位論文(木谷, 2017)の論題を、『体験としての自閉症スペクトラム障害—成人期を生きる当事者の「パーソナリティ (personnalité)」の発展に着目して—』とした。本節では筆者の博士学位論文の核である、自閉症スペクトラム障害 (autism spectrm disorder : 以下ASD) 当事者の内的体験に着目したことの経緯を述べたい。

(1) 障害を捉える視点

筆者は、博士学位論文において、ASD当事者のあり方を捉える、新たな視点の開拓を目指した。そのために、当事者の内的体験からASDを描出することを試みた。また、こうした観点を、「体験としてのASD」と表し、博士学位論文全体を貫くテーマとした。以下、この観点を導いた理論的背景を述べる。

日本のリハビリテーション医学を牽引してきた上田(1981)は、医学におけるリハビリテーションとは、治癒を目指すものではないと述べている。障害者が、「人間らしく生きる権利・そのような権利を行使しえている状態の回復」が目的だとする。こうした観点から、上田(1981)は、ICIDH(機能障害・能力障害・社会的不利の国際分類)が示す、障害の三つの次元、機能・形態障害 (impairment), 能力障害 (disability), 社会的不利 (handicap) に、独自に「体験としての障害」という次元を付け加えた。「体験としての障害」とは、客観的な障害が、当人の実存としての生活体験に反映した姿で、「実存のレベルでとらえられた疾患・障害といってもよい」とする。上田(1981)は、客観的な障害に関する、どのような精緻な分析や研究をしても、「体験としての障害」の次元を扱わなければ、配慮が偏ることになると述べた。そして、障害を持つ人自身の生き方やあり方の全体を捉える重要性を指摘した。

また、障害を持つ子どもの成長を、「パーソナリティ全体 (personnalité totale)」の発達と結びつけて捉えようとした先達には、フランスの精神医学者Wallonがいる。医師として重度の障害を持つ子どもたちと出会い、発達に不均衡を抱えた子どもたちのあり様を、人の精神発達の成り立ちを知る、顕著な例として理解しようとした(浜田, 1994)。Wallon(1952, 1956a)は、「パーソナリティ (personnalité)」というものを、固定的なものとして捉えたり、いくつかの類型にあてはめて理解したりはしない。「パーソナリティ (personnalité)」とは、一人の人が、環境といかに関わり、どの様に存在しているのか、という、「行動のすべてを通してあらわれる人間の全体」(Wallon, 1956a)を示すとした。例えば、「子どもにおいては、知能の発達は、そのパーソナリティ全体と結びついている」とWallon(1952)は考えた。知的な能力のみを取り出して、一人の子どもを捉えるのではなく、「子どもが結べるようになった社会的関係に関連付けて考える」(Wallon, 1952)とした。Wallon(1952, 1956a)は、環境と関わり合いながら、その環境と共に存在する、一人の人の「パーソナリティ全体 (personnalité totale)」を理解しようとした。

従来の治療医学は、原因究明の上に立った、原因的・根本的な治療法に高い価値を置いてきた。その努力によって、治療医学は急速な進歩を遂げてきたことは事実であり、その意義は大きい(上田, 1981)。現在ASDをとりまく研究では、その本態に関して、様々な研究がなされている。だが、ASDもまた、客観的に捉えられる特徴から説明し尽くせる対象ではないと筆者は考える。その人が抱える困難が、生活する環境全体から、どの様に形づくられるのかを捉える視点が必要

である。

（２）自閉症スペクトラム障害を捉える視点

かつて、Asperger (1944) は、既存の類型に当てはめて人を理解するのではなく、一人の人の全体的なあり様を、本人との日常の関わりの中から理解しようとした。この姿勢は、ASDの研究が深化してきた現代だからこそ、改めて見直されるべきではないか。現代のASDへの理解には、認知的な特徴と、そうした特徴を持ちながら、その人がいかに生きようとしているのか、という全体をバランスよく捉える視点が重要だと考える。

自閉症研究の始まりは、「情緒的交流の自閉的障害」と題された、Kanner (1943) による論文からとされる。Kanner (1943) による報告の翌年、Asperger (1944) が、よく似た特徴を持つ4人の子どもの報告をした。彼は、オーストリアの小児科医で、治療教育学を専門としていた。一人の子どもの「人格」を、既存の類型学に当てはめて理解するのではなく、「有機的構造」と共に、全体的なあり様として理解した。そうした視点から、当時まだ明らかにされていなかった「子どもの1類型」を発見し、「自閉的精神病質」の概念を提唱した。Asperger (1944) は、対象となる子ども達と日常生活を送り、「互いに反応を及ぼしあう生きた一体性を通して自ら関与する」中から、その概念を導き出した。「自閉的精神病質」の基本的障害は、外界との関係の狭窄にあるとした。だが、この報告は多くの国や地域に行き渡ることなく、長らく忘れられることとなる。

1980年代、Wing (1981) が、Asperger (1944) の報告を再度取り上げ、自閉症の軽症グループの存在と、その支援の必要性を示し、アスペルガー症候群という捉え方が専門家の間に広まった。また、重い知的障害や行動障害を持つ人から、知的障害を伴わない人まで、連続線上にある人たち全てを自閉症と捉える立場を示した。Wingは、正常範囲とされる人たちと自閉症の人たちとの連続性を示唆することで、自閉症概念を拡大した。しかし、この際、Wing (1981) は、Asperger (1944) が示した「自閉的精神病質」の基盤にある、「人格」への捉え方を捨象している（田中，2009）。Wing (1981) は、理解と支援に役立つ知識を広く伝えることを目下の課題とし、それを実現させた。

2013年にDSM-5が出版され、広汎性発達障害からASDへの変更があった。ASDは、多くの精神疾患同様、本態が不明とされる。神経心理学的な水準の機能障害が想定されているが、明確な知見は乏しい。結果、DSM-5の診断基準に記載された、七つの症状例は、観察可能な症状や特徴によって示される（桑原，2014）。現在は、認知機能の特徴から問題を説明し、理解しようとする研究が活発である。こうした研究によって、当事者や周囲の人に、特徴を生かしたり、補ったりする手立てが伝えられていくことの意義は十分ある。一方で、客観的に記述できる症状や特徴に注目が集まりやすくなり、当事者一人一人が、いかなる内的体験世界を生きているのか、といった側面が見落とされることが危惧される。

（３）知的な遅れを伴わないASD当事者への着目

筆者は、当事者が生きている内的体験世界に着目し、さらに、青年期から中年期を生きる、知的な遅れを伴わないASD当事者に焦点を当てた。以下にその背景を述べる。

従来からの発達障害の研究は、知的な障害を伴った自閉症、重度知的障害、重度の脳性麻痺等、重度の機能的な障害を持つ重度発達障害が中心であった。しかし、発達障害学の進歩によって、

知的な遅れが無い、もしくは軽い発達障害の子どもたちの研究も盛んになっていった（杉山、2000）。自閉症の場合、この動向に大きな貢献をしたのは、先にも述べた、Wing（1981）による、Asperger（1944）の再評価である。日本国内においては、1990年頃、高機能広汎性発達障害という概念が成立した。この概念は、知的な障害を伴わない（IQ $\geq$ 70）高機能例（杉山、2008）を表す。こうした特徴を持つ子どもたちの存在は、軽度発達障害という総称と共に、多くの人々に知られる様になった。彼らは健常児との間に連続性があり、どこまでが障害として捉えられ、どこまでが性格的な特徴や、生育による特徴とみるべきか、不明瞭となる場合が生じる。そのため、障害としての認識不足をまねき、親や教師等が本人に間違っただけの対応をすることで、二次的な情緒と行動の問題が増悪する場合がある。こうした事態に、次第に目が向けられるようになっていった（杉山、2000）。機能面における困難の強弱だけを見て、障害の軽重は簡単には捉えられない、ということが理解される様になった。次第に発達障害という言葉の前に、軽度という言葉をつけることに慎重な立場をとる研究者が増えた。また、文部科学省（2007）は、軽度発達障害の表記について、その意味する所が必ずしも明確でない等の理由から、この呼称を使用しないことを表明した。

田中（2008）は、軽度発達障害という言葉について、「彗星」の様に登場し、これまで見過ごされてきた子どもたちの「生きづらさ」を浮かび上がらせ、そして今はもう使われなくなったと述べている。軽度発達障害という言葉は、発達障害臨床に携わる人々から、一般の人々に至るまで、多くの人々の論議を引き出した。そして、観察可能な症状や特徴だけではなく、そうした特徴を持って成長する当事者の体験、という側面に、逆説的に目を向けさせる役割を担ったといえる。

上述してきた様に、2000年以降、知的な遅れを伴わない、いわゆる高機能ASDの子ども達に対し、理解と支援のまなざし、そして社会の仕組みは、格段にきめ細やかなものになった。その一方で浮かび上がってきたのは、「先天障害を障害と知らずに成長し、途中で気づいたという事情」（ニキ、2002）を抱えた高機能ASDの成人当事者の存在である。高機能ASDの成人当事者が抱える問題は、時代背景や生き抜く中での無理や疲労の集積等、幾重にも重なり合った因子によって、非常に複雑な状態像を作り出している。そうした中、彼らは、絡み合った問題の核心部分に、障害が存在することを知らされ、障害と共に、新たな自己像を形成し直す必要に迫られる。この出来事は、彼らの人生における、大変重要な局面となることが想像される。

また、2000年以降に診断された成人当事者の中には、現在、中年期という「一種の臨界状況」（広沢、2016）に直面している人も少なくない。長年、自閉症の治療にあたってきた村田（2016）も、幼児期より関わってきた対象者が、中年期を過ごす姿に直面し、「中年期の自閉症の人々も私たちと同じように、いやそれ以上に中年期の発達課題をいかに乗り越え、自分にあった老年期をどう迎えるべきかを考え、悩んでいる」と述べる。

青年期から中年期を生きる、知的な遅れを伴わないASDの当事者は、これまでの人生と、これからの人生を、どの様に結び付けて生きていこうとするのか。その内的体験の様相について、調査によって明らかにした研究は乏しい。すなわち理解を待たれている課題と考えた。

（４）ASD当事者の「自己」と「パーソナリティ（personnalité）」

これまでの人生と、これからの人生を、どの様に結び付けて生きていくか、それはすなわち、ASD当事者が抱える「自分」という意識の様相を理解する試みである。そのために筆者は、

博士学位論文において、先ず、「自分」についての定義を明確にした。

一般的には、意識の主体を自我とよび、意識の対象としての自我を自己とよぶ（越川，1999）。筆者の博士学位論文もこの定義に従ったが、当事者自身が語り出した体験に着目する意味合いから、自己を「自分」と表記した。さらに、筆者は、いくつかの理論仮説をもとに、「自分」について定義した。杉山（1992，1994）や小林（1999，2000）は、精神病理学の視点から、また、浜田（1992）は発達心理学の立場から、ASD当事者が、「自分」という意識の形成に困難を抱えていることを指摘している。これらの先行研究を踏まえ、「自分」という意識の形成には、他者と意味世界を共有する体験が必須であり、その体験を蓄積することが、内的体験を意味づけ、行動を組み立てる「自分」という意識を形成していくと捉えた。さらに、この「自分」という意識は、生活する世界との関わりのあり方全体を指す、「パーソナリティ（personnalité）」（Wallon, 1952・1956a）の中核となって機能していると位置づけた。

3. 「対話」を研究方法として選択した意義

上述の様に、「自分」、さらには「パーソナリティ（personnalité）」の定義ができたところで、筆者の研究の支柱が定まった。そこで、ASD当事者の自己についての先行研究をレビューし、ASD当事者が抱える「自分」という意識の様相を明らかにする調査方法や分析方法を検討した。検討の結果として、「対話」を研究方法として用いる方法論が選択された。以下、その経緯を述べる。

（1）ASD当事者の自己についての先行研究の成果と課題

ASD当事者の自己についての先行研究の成果をレビューした結果、①ASD当事者の陳述内容をカテゴリーに分類し、数量化の手法を用いて分析した研究（Lee & Hobson, 1998；野村・別府，2005；滝吉・田中，2011）、②当事者の内的世界を捉えるために、当事者の手記を分析した研究（佐藤・櫻井，2010；亀井ら，2011）、③当事者の内的世界を捉えるために、当事者の語りを分析した研究（俵谷，2008；間宮・俵谷，2011；平野，2014）が得られた。

①の、ASD当事者の陳述内容をカテゴリーに分類し、数量化の手法を用いて分析した先行研究によれば、ASDの人は、他者との関係の中で「自分」を理解することに困難を持っている（Lee & Hobson, 1998）が、それは年齢に伴って変化する可能性がある（野村・別府，2005）。また、ASDの人は、他者との関係の中で「自分」を理解することが全く無いのではなく、他者との関係の中で「自分」を理解した場合、「自分」の否定的な面を捉える可能性が高いこと（滝吉・田中，2011）が示された。

②と③の、当事者の内的世界を捉えるために、当事者の手記を分析した研究と、当事者の語りを分析した先行研究によれば、ASDの人は、境界と統合の弱い内的体験世界を生きており（佐藤・櫻井，2010）、他者を意識して関わりをもとうとすることで、かえって混乱する特徴（佐藤・櫻井，2010；亀井ら，2011）がある。また、診断告知を受けたり、障害者手帳取得を転機に、紆余曲折を経ながらも、独自の「自分」らしさを見出したり、他者に関わる独自の方法を探求する様子（佐藤・櫻井，2010；亀井ら，2011；俵谷，2008；間宮・俵谷，2011；平野，2014）

が報告された。

①の、Lee & Hobson (1998), 野村・別府 (2005), 滝吉・田中 (2011) が使用したデータは、ASDの子どもや青年との面接から得られた、質的なデータである。その後、対象者の表現を研究者が設定したカテゴリーに分類し、数量に置き換え、立証可能なデータとしている。そうすることで、ASD当事者が「自分」に対してどのような理解を持つのか、年齢による特徴もある程度明らかにしている。こうした定量化の方法には、「抽象的で一義的で明確な関係性を確立する」(やまだ, 1987) 長所がある。しかし、現実生活に密着し、そのため複雑な、一人の人の「パーソナリティ全体 (personnalité totale)」(Wallon, 1952, 1956a) や、なぜ、「自分」に対し、そうした理解を持つに至ったのか等の経緯を捉えることが難しい。

この課題に対応する研究として、②の当事者の手記を質的に分析した先行研究があげられる。佐藤・櫻井 (2010) は、手記分析にあたり、方法論選択の妥当性を杉山ら (1998) の先行研究を根拠に述べている。佐藤・櫻井 (2010) は、対象が高機能のASD当事者であっても、意図的に内的な体験を聞き出すことは困難であり、手記という手段によって初めて詳細に自らを語ることが可能になると考えた。しかし、佐藤・櫻井 (2010) は、手記の執筆者が自ら認識し表現する「自分」と、研究者が手記から客観的に認識する執筆者の「自分」との間には、ずれが生じる可能性があるとして述べており、その問題を克服できなかったと記す。そのずれを、直接本人に確かめることができない点において、手記分析にも限界があることが示された。

この課題を乗り越えるための手段として、③のインタビュー調査があげられる。俵谷 (2008), 間宮・俵谷 (2011), 平野 (2014) は、ASD当事者の内的体験を聞き取るインタビュー調査を実施し、それを分析することに成功している。こうした調査研究が成立した要因については、以下の様に検討した。まず、杉山ら (1998) が、高機能のASD当事者であっても、彼らから意図的に内的な体験を聞き出すことは困難だ、との見解を示してから、10年以上の年月が過ぎていることがあげられる。その間、当事者による手記が多く出版され、また、2000年という境目以降、ASDを取り巻く社会状況は変化した。つまり、ASDへのまなざしの変化、深化により、当事者自らが「自分」を語ることができる土壌が醸成されたということである。こうした、昨今の状況が、ASD当事者へのインタビュー調査の可能性を拓いてきたと考える。

このように、先行研究へのレビューを経て、筆者の博士学位論文は、調査方法として「対話」を選択するに至った。また、それは結果的に、北大教育臨床心理学研究グループで培われた知識や技術を踏襲するものでもあった。というのは、ASD当事者へのインタビュー調査を行った、俵谷 (2008), 間宮・俵谷 (2011), 平野 (2014) は、北大教育臨床心理学研究グループにおいて取り組まれた、修士論文をもとに論文化したものだからである。俵谷 (2008), 間宮・俵谷 (2011) は、診断告知という局面に、そして平野 (2014) は障害者手帳取得という局面に着目している。潜在的にはASD当事者の自己に関わる領域を扱っていると捉えられる。しかし、筆者の博士学位論文は、俵谷 (2008), 間宮・俵谷 (2011), 平野 (2014) が着目した転機を含め、彼らの人生行路に沿ってASDの成人当事者が抱える「自分」という意識の様相を明らかにする点において、新たな問題意識を持っていたといえる。

(2) 「対話」を研究方法として用いることの理論背景

ここで、筆者の博士学位論文における「対話」の意味を説明したい。筆者が用いる「対話」とは、「全身活動的」(森岡, 2002) な共同行為を指している。「対話」を調査方法として用いる

必然性は、「自分」に関する背景理論からも説明できる。

Wallon (1946) は、「自分」という意識の形成過程に、他者との関係性が深く関わっていることを示した。混沌と一体化した自他未分化の状況から、「自分」ではないものを除外していくことを、その第一歩とした。こうした過程は、子どもだけではなく、成人であっても同様のことがいえるだろう。「自分」の成立には、異質な存在としての他者が必要なのである。

また、そこで語られた「自分」が、語り手と聞き手による、「全身活動的」(森岡, 2002) な共同行為によって構成されたものであることが、その後の分析に重要な意義をもたらすと考える。声を出したり、話したりする行為は、そもそも、身体から音を出すということである。音声の抑揚のもとには情動があり、情動の素材には、筋肉の緊張であるトーンズがあって、姿勢(態度)が関係している(Wallon, 1938, 1956b)。人と人が向き合っていく「対話」では、そうした全身活動が相互に影響を及ぼし合うことになる。

手記分析においても、インタビュー調査においても、表現された言葉をデータとして扱うのは同じである。しかし、手記には、それが誰と共に、どのような経緯を持って生成された表現なのかが、明示されない側面がある。筆者は、調査において語り出された「自分」が、「全身活動的」(森岡, 2002) な共同行為によって生み出されたものであるからこそ、文字化に耐え、より本質的な解釈と分析を導くことが可能になると考えた。質的データの分析とは、本来、調査者という存在を匿名にはできないのであり、むしろ調査の場における当事者性を生かした方法と考える。

筆者の博士学位論文では、「対話」を調査方法として用い、さらに、調査者本人が分析を行うことを、方法論として組み込んで研究を進めた。だが、この方法論は、一つの表現が多くの意味を持つデータを扱うことの限界を内包する。よって、数量的な研究と相補関係を結ぶ研究として位置づけた。

4. 博士学位論文の概要

本論文は、筆者の博士学位論文(木谷, 2017)の内容を圧縮して示すことを意図したものではない。よって、次節以降は、詳しい調査の手続きや、分析方法を省略し、論を展開することとなる。しかしながら、最低限、本論文の理解に欠かせない、筆者の博士学位論文の目的や、方法、構成を含む概要を本節で述べ、読者との共通の認識を得たい。

まず、筆者の博士学位論文の目的は、ASD当事者のあり方を捉える、新たな視点の開拓を目指し、当事者の内的体験からASDを描出することであった。そのために、ASDの成人当事者と筆者との間に「対話」を成立させ、「自分」について語り出してもらうことを試みた。さらに、彼らが抱える、「自分」という意識の様相を、属性や強弱ではなく、成立のプロセスとして、その人の身体性や体験する生活世界、そして人生行路との関係で捉えることを試みた。現代を生きる、ASD当事者一人一人の幸福について、共に考えていける新たな視点を、支援者と当事者自身に提供することを意図した。

筆者の博士学位論文は、上記の目的の元、研究1、研究2、研究3の、3つの調査研究を行い、その成果をまとめたものである。研究1では、10名の当事者の語りを質的に分析し、共通性を見出すことに主眼を置いた(木谷, 2015)。分析に用いた、Modified Grounded Theory

Approach (以下M-GTA) という手法は、個別特性を捨象することで、人間行動の予測と説明に役立つ理論を生成する方法である(木下, 2003)。こうした、共通性から対象の様態を予測し、説明しようとする観点と、一人の人が生活してきた姿を丁寧に辿り、その固有のあり方を理解しようとする観点は、どちらも人間を理解する試みでは、重要と考えた。そこで、研究1の予備調査の協力者であったAさんからのみ得られた、人生の時期区分に沿った語りのデータを、ライフストーリーという観点から捉えることを試みた(木谷, 2016)。それを、研究2としてまとめた。二つの研究を重ね合わせることで、ASD当事者の「自分」の形成過程と、その骨格が、個人の人生という時間軸の中で、どのような体験として語られるのかが、よりリアリティーを伴って理解できると考えた。よって、研究1と研究2は、並列的かつ相補的關係にあり、得られた二つの成果を重ねて読み取ることで、「体験としてのASD」への理解をより深めることができると考えた。その結果、ASDの成人当事者が、診断後生き抜いていく鍵は、「繋がりを感じられる他者」と関わりながら、「自分について他者に語る物語」(森岡, 2002)を育み、安定させていくことにあったと考察した。この考察から、ASDのピア同士は、「対話」を通し、互いをどう生かし合い、支え合っているのか、という次なる課題が見出され、研究3へと展開した。研究3では、ASDのピア同士の関わり合いの内実を明らかにすることを目的とした。ASDの女性当事者が集うセルフヘルプ・グループを4年間調査した記録を分析した(木谷, 2017)。

終章では、三つの研究を通して得られた成果を示した。「パーソナリティ (personnalité)」(Wallon, 1952・1956a)の発展を促す契機となる体験として、(1)「自分」の身体性と繋がりをもつ体験、(2) 診断告知によって社会と意味世界を共有する体験、(3) 繋がりを感じられる他者と出会う体験の3点を見出した。また、さまざまな狭間を生きる彼らが「人の中で生きられる自分の形を探す」試みを続けている様相を論じた。

5. 「対話」は何をもたらしたか

「対話」を研究方法として用いたことで得られたものは、何であったのか。本節では、先ず、「対話」を研究方法とするために筆者が行った具体的な工夫や配慮について述べる。次に、一連の研究の中で最初に得られた成果、“成人後にASDと診断された人が「自分」を尋ね出していくプロセス”を提示する。さらに、このプロセスの発見から見出された、ASDの成人当事者の、「パーソナリティ (personnalité)」(Wallon, 1952, 1956a)の発展を促す、三つの契機について議論する。最後に、研究に取り組んだ筆者自身が「対話」から得たものとは何か、についての考察を試みる。

(1) 「対話」を方法論とするために

上述してきたように、筆者の博士学位論文では、一貫して、「対話」を方法論として用いた。調査方法として「対話」を選択する点は、北大教育臨床心理学研究グループが培ってきた、思想と科学を継承するものである。しかし、ASDの成人当事者が抱える「自分」という意識の様相を、間宮・俵谷(2011)、平野(2014)が着目した転機を含め、彼らの人生行路に沿って描出することは、新たに目指すところであった。また、「自分」という意識の様相を、「対話」によって

語り出してもらうためには、さらなる工夫や配慮を要した。その工夫や配慮とは、本論文の冒頭で述べた、“apprivoiser”をキーワードとすることで改めて整理ができるところである。

研究1を行うための予備調査では、すでに2年間筆者との関わりを経たAさんに協力を依頼した。筆者（臨床心理士）は、調査開始当時、福祉の分野で発達障害の人の相談支援を行う立場を4年経験していた。Aさんは、もともと相談支援の利用者で、筆者との個別の相談は2年程を経て終結となっていた。しかし、調査者が、協力者の相談支援を担当していた事が、調査結果に及ぼす影響については、特別の配慮をする必要があったといえる。その特別の配慮の内容とは以下の通りである。2年程の相談支援の中で、Aさんと培ってきた信頼関係は、「対話」を展開する上でプラスの要素として働くことが予想された。しかし、インタビューと、相談とをAさんに混同させてしまえば、研究の目的に沿った語りを得にくくなることが考えられた。従って、相談支援で知り得ていた情報を、安易にインタビューの場で持ち出さない等、研究目的に沿って改めて話を聞く、というスタンスを意識的に保つことに注意した。また、支援者でもあった筆者への遠慮等から、調査に無理をして臨むことがないよう、協力者に不利益が生じないことを最優先している旨を、Aさんに随時伝えた。

こうした特別な配慮のもと、“apprivoiser”すなわち絆を創ってきたAさんとの「対話」を手掛かりに、調査研究1の成立条件を探索した。筆者の未だおぼつかない質問の意図を聞き取り、応答できたのは、Aさんと筆者が、2年間関わり合った、時間の積み重ねがあったためと考える。予備調査の結果をもとに、インタビュー・ガイドを見直し、また、「自分」という意識の様相を語り出すための、インタビュー方法を洗練することができた。例えば、出来事の列挙が続いた時に、「そのことを、その時のあなたはどのようにお感じになっていたのでしょうか」等と問いかける方法を筆者は獲得した。予備調査では、こうした、語りの勘どころをおさえる重要性を確認した。

研究1の本調査実施にあたっては、筆者と初めて話をする対象者も含まれていたため、必要以上に緊張させないための工夫や配慮が必要であった。例えば、事前の情報を丁寧に伝えておくことは、ASDの特徴をもつ協力者には重要であった。インタビューでの質問項目を予め明示し、事前にメモをするなどして協力者が十分準備できるようにした。また、当日は、一人につき平均180分という時間をかけて、言葉のイメージをすり合わせた。これは筆者自身、彼らの内的体験を「なぞる」（尼ヶ崎,1990）体験となった。そのためか、10名中3名のインタビューを立て続けに行った所で、筆者は体調を崩し、2週間程調査は中断した。その際、筆者は、相談支援という職業上の立場で話を聞いていく事と、彼らの内的体験世界を「なぞる」（尼ヶ崎, 1990）「対話」の違いを体験した。筆者にとって、短期間に複数の人と“apprivoiser”の関係を築くということは、濃縮された時間を生きる、非日常の体験であったと考えられる。その後は、1週間から2週間に1名のペースで調査を行い、筆者自身のコンディションにも配慮しながら、インタビューに臨むことを心掛けた。

研究2では、予備調査を行ったAさんの語り（逐語記録A4用紙52枚分）を再度分析対象とし、抱えてきた「自分」の固有のあり方と、「自分」に苦悩する語りに焦点をあて、ライフストーリーとして再構成した。再構成したライフストーリーの信憑性を高めるため、内容をAさん本人と確かめ合い、その「対話」も重要な分析過程と位置づけた。Aさんからは、表現の修正や語りの補足の提案があった。極力意向に沿う形で修正したが、筆者が元のままの方がAさんの姿が伝わりやすいと感じる部分については、そう提案し、承諾を得た。最終的に、Aさんからは論文

に対し、「自分」のことを「言葉にしてくれていると感じる」との感想が語られた。その後、筆者は、研究2の成果を学会誌に投稿し、木谷（2016）として公表した。冊子化された抜き刷りの論文を、数冊ずつAさんと分けた。Aさんと時間をかけて築いてきた“apprivoiser”は、協働する関係と、喜びの共有をもたらした。

研究3では、セルフヘルプ・グループ発足からの4年間、筆者自身も、メンバーとの関係性の中に身を置き、データを収集した。筆者が福祉の分野で相談支援を担当していた対象者の中に、グループの発足を希望する人があり、その組織作りを支援することとなったのが、このグループとの関わりの始まりであった。筆者は、開催場所の確保やメンバーの募集、グループ運営の骨格作りの相談相手を務めた。発足から1年、グループは市民活動団体としての登録を得て、公共の施設の一室を借りて開催されることとなった。同時に、グループ運営やメンバーの参加状況も、ある程度軌道に乗った。筆者の、業務としての支援は、その段階をもって終了となった。以降、筆者は、グループのサポーターとして、ボランティアでの参加を認められる立場となった。メンバー全員から調査を続行する許可を得た。上述の通り、メンバーの中には、調査者である筆者が支援者として相談を担当していた人もいた。相談支援の中で培ってきた信頼関係は、「対話」を展開する上でプラスの要素として働くことが予想された。だが、グループの場合、相談支援の場とを混同させてしまえば、ピア・サポートの機能を十分引き出せない可能性があると考えた。従って、グループ発足当時、その場が、純粋にピア・サポートの展開する場となるよう、筆者は同席するだけの状態を心がけていた。しかし、何も話さないが身体がその場にある状態は、かえってグループの雰囲気を緊張させているということが、メンバーとのやりとりから分かった。あるいは、話を聞いているにも関わらず、何も話すまいと身構える筆者の緊張が、メンバーに伝わっていたのかもしれない。こうした経緯から、筆者自身も、メンバーとの関係性の中に自然な形で身を置くことで、グループをサポートする様になっていった。メンバーの話に頷いたり、合いの手を入れたり、わからない時には質問をしたりする。こうした存在の仕方が徐々に定着した。グループが展開する最中、筆者は、節度を保ちつつも「自分」自身であることに努めた。メンバーからも、そうした筆者の態度は許容された。そして、グループ終了後は研究の視点で「対話」を振り返る。この二つの態度で調査に臨んだ。こうした調査態勢が整うまでに、数年を要した。この数年とは、まさに、“apprivoiser”を調査の拠り所とするための時間だったといえよう。

「対話」を方法論とするために、筆者が行った具体的な工夫や配慮を言語化すると、以上のような内容になる。しかし、そこには、“apprivoiser”すなわち「絆を創る」（小島、2006）という、言語化しきれない、関係性や信頼関係の蓄積があったと考えられる。

（2）成人後にASDと診断された人が「自分」を尋ね出していくプロセス

筆者は、「対話」を方法論として研究を展開し、表記のプロセスの発見に至った。このプロセスの発見が、筆者の博士学位論文を、結論まで導いたといっても過言ではない。

研究1では、ASDと診断された成人当事者に、インタビュー調査を行い、当事者が語る「自分」と共に、その内的体験を検討した。また、M-GTA（木下、2003）を用い、複数の当事者の語りの中に、共有する骨格を見出し、予測と説明に役立つプロセスを導き出すことを試みた。

研究1の調査協力者は、表1に示す10名である。

表 1 調査協力者一覧

名称	年齢	性別	診断名	診断歴	インタビュー所要時間
A	40代後半	女性	特定不能広汎性発達障害	7 年	167分
B	40代前半	男性	アスペルガー障害	6 年	150分
C	30代後半	女性	広汎性発達障害	1 年	166分
D	40代後半	女性	広汎性発達障害	3 年	130分
E	20代後半	女性	アスペルガー障害	5 年	155分
F	30代後半	女性	アスペルガー障害	8 年	210分
G	30代後半	男性	アスペルガー障害	3 年	168分
H	30代前半	女性	アスペルガー障害	3 年	220分
I	30代前半	男性	アスペルガー障害	3 年	238分
J	30代前半	男性	アスペルガー障害	5 年	202分

分析の結果、概念25個、サブカテゴリー 6 個、カテゴリー 5 個が生成された。以下に、“成人後にASDと診断された人が「自分」を尋ね出していくプロセス”の全体像を文章で簡潔に示す。さらに、図 1 にカテゴリー間、概念間の関連をまとめた結果図を示す。尚、カテゴリーは〈〉、サブカテゴリーは〔 〕、概念は『 』と記してある。

成人後にASDと診断された人が「自分」を尋ね出していくプロセス

成人後にASDと診断された人が「自分」を尋ね出していくプロセスは、〔自分と繋がりにくい〕という面と、〔他者と繋がりにくい〕という面が影響し合って生ずる〔おぼろげな自分〕を抱えつつ、なんとか他者と関わって生きようとする中で動き出している。彼らは『“できなさ”の中に自分を垣間見る』という苦しさの中で、〔どうにか生きていく手立て〕を講ずるのだが、その努力がかえって『“できなさ”の中に自分を垣間見る』苦しさを再燃させてしまう。この時の〈身体への態度〉は、『身体の訴えをきき流す』態度が取られており、〈苦悶のサイクル〉からは容易に抜け出すことができない。しかしその後、本意ながらも『身体の訴えをきき入れる』転機が訪れ、医療機関等に繋がり、〈調整のサイクル〉へと転ずることになる。『診断名が自分を説明してくれる』という安堵感が〔他者と向き合う〕ことや〔自分と向き合う〕ことを支える一方で、『診断名では自分を語りきれない』という満たされなさも抱えていく。そうした自問の循環の中から、『障害の枠組みに安住しない』との思いを抱き始め、〈人の中で生きられる自分の形を探す〉試みへと導かれていく。〈身体への態度〉としては『身体の訴えをきき入れる』態度を保つこと、そして〈抱えてきた自分〉をもう一度抱え直すことが、受容と諦めと決心とをないまぜにした、『自分を抱え直して生きよう』という姿勢に表れる。しかし、『人の中で生きよう』とするゆえに、再び『“できなさ”の中に自分を垣間見る』こととなり、〈苦悶のサイクル〉に戻っていつてしまうこともある。そうした、行きつ戻りつの巡りの中で、自己を尋ね出すプロセスは続いていた。

(3)「パーソナリティ (personnalité)」の発展を促す三つの契機

成人後にASDと診断された人が「自分」を尋ね出していくプロセスの発見は、筆者の博士学位論文の結論を以下の様に導いた。

筆者は、研究 1 から導出された、ASDの成人当事者が「自分」を尋ね出していくプロセス（図 1 参照）に、彼らの生活世界の広がりや、存在の仕方の変化が示されたことを読み取った。先ず、

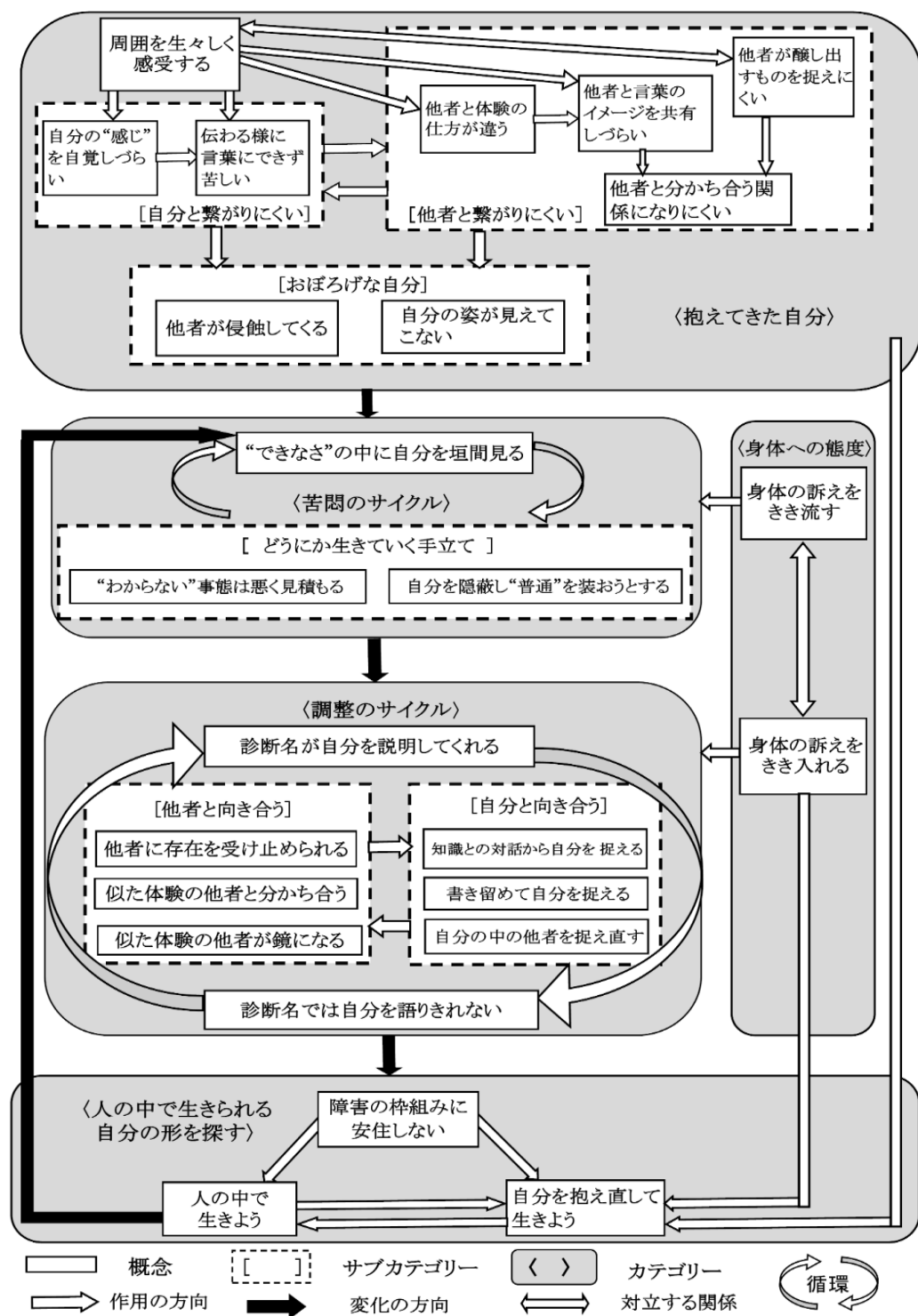


図1 結果表

成人後にASDと診断された人が「自分」を尋ね出していくプロセス

このプロセス図において注目されたのは、本人による、〈身体への態度〉の選択である。ここがスイッチの役割を担っていると考えた。つまり、『身体の訴えをきき入れる』態度を選択することで、プロセスが次の展開へと導かれていることが見出された。二つ目は、診断告知による安堵感と不満感の揺れがもたらす、内的体験である。三つ目は、〈調整のサイクル〉において、[他者と向き合う] 体験である。

プロセスを次の展開へと導く、この三つの要素を、生活世界との関わり方を変化させるスイッチ、すなわち、「パーソナリティ (personnalité)」(Wallon, 1952, 1956a) の発展を促す契機として捉えた。以下にその三つの要素について述べる。

① 「自分」の身体性との繋がり

研究1の分析結果から、ASD当事者は、[自分と繋がりにくい] 面と、[他者と繋がりにくい] 面を持ち、これら二つが影響し合うことで[おぼろげな自分]を抱えてきたことが示された。彼らは、他者と意味世界を共有する地盤が十分に築けず、内的体験の意味づけや、どう行動すべきかが定まらない不安定の中を生きてきた。他の同世代の人たちと同じ課題を与えられ、当然の様に課題に対応することを求められてもきた。その求めに応ずるため、『身体の訴えをきき流す』ことで〈苦悶のサイクル〉を巡らせ、どうにか生活を送ってきた。

この〈苦悶のサイクル〉に、他者との繋がりは無いか、もしくは限られた他者との固着した関係に閉ざされて、問答が繰り返されていた。しかし、やがてそのサイクルが、心身の不調により、破綻の時を迎えることになる。その不調は、うつや不眠や腰痛、そして摂食や飲酒等の問題として、当人の生活全体を立ち行かなくする程の強さを持って、ある時期に出現していた。

研究2のAさんの場合、30代後半まで、この〈苦悶のサイクル〉が巡っていた。苦しいながらも、なんとか社会に位置付き、子どもを一人で育てた。30代後半、子どもの不調を一人で抱えきれなくなったのと同時期、Aさんのうつは現れた。一人で頑張り続けてきたAさんは、ここでようやく医療機関と繋がり、子どもと共にASDの診断を受けることとなった。

Wallon (1934) によれば、個人の身体内で起こる情動は、一見邪魔な働きをしている様に見えるという。しかし、「個体同士の間で関係をもつこと」のために、人間には情動が発動する機構が備わっていると看做す。同様に、当人にとって、『身体の訴えをきき入れる』転機とは、これまでの適応をくつがえす、不本意なものとして出現するようである。しかし、その転機は、社会資源との結び目をつくり出し、当人と環境との関わり方を変化させる働きを持っていた。

さらに、研究3では、「自分」の身体性との繋がりの意識を他者と共有することが、「自分」という意識の発展に関与すると考察した。ピア同士の「対話」を分析すると、そこには、『身体の訴えをきき入れる』要素が多分に含まれていた。彼らは、メタファやオノマトペを使用することで、身体との繋がりの意識を言語化し、ピアと意味世界を共有していた。例えば、協力者のMさんは、「眠れないんじゃないか」という内的な不安を、食べることで埋め合わせようとする、過食を話題にしていた。過食する「自分」を他者に率直に語ることで、現状と向き合い、「自分」を制御する可能性を模索していた。

この様に、「自分」の身体性との繋がりは、「自分」という意識を、より確かなものへと変化させていた。ASD当事者にとっての身体の不調は、「自分」の生活全体と向き合うための、メッセージとして扱うことが必要と考える。そうすることによって、「自分」のあり方が変化し、さらなる発展の契機となると考える。支援の場においても、身体から出されるメッセージを丁寧に扱うことが、ASD当事者の「パーソナリティ (personnalité)」(Wallon, 1952, 1956a) の発展

を支える上で重要と考える。

ただ、例えば、支援に繋がる以前の未診断の当事者が、『身体の訴えをきき流す』ことで、〈苦悶のサイクル〉を巡らせ続けている場合、周囲の人は、どのような関わりができるだろう。一つは、対象者の身体の不調が限界に達する前に、周囲の人がそれに気が付き、医療機関等の社会資源に結び付けることである。苦しさの中で、本人が、自死を選択する等の最悪の事態を、未然に防ぐ必要がある。周囲の人に、図1のプロセスを活用してもらいたい。一方で、身体の影響を本人が体験するからこそ、『身体の訴えをきき入れる』態度を、真に、主体的に選択できるとも考えられる。研究1の分析からは、そこに重要な意味があることが示されている。今後、研究1から導出されたプロセスを、様々な状況にある当事者の体験に重ね、本人が、『身体の訴えをきき入れる』態度を主体的に選択するために、周囲の人ができる関わりについて、さらに検討を深めていきたい。

② 社会からの承認

Williams (1992) やニキ (2002) の手記には、診断告知の体験が、救いと感じられたことが記されている。研究1の分析結果からも、『診断名が自分を説明してくれる』という安堵感を体験することが示された。しかし、それだけに留まらず、彼らは、『診断名では自分を語りきれない』という満たされなさも同時に抱えていた。この、診断告知という出来事の意味を、研究1では、内界に外界から、束ねられた「内なる他者」(Wallon, 1956b) が付与される体験として捉えた。診断名が内なる対話の相手となり、「自分」の姿を照らし出す様子と理解した。しかし、その内なる対話の相手は、生身の他者とのやりとりを通して獲得した相手ではない。そのため、異物としての違和感を抱えていくと考えられた。研究2では、「自分」にASDという診断名が付与される体験を、“社会から与えられる物語”という観点から考察した。ASDという、社会から与えられた物語を後ろ盾にして、Aさんは実母に対し「自分について他者に語る物語」を初めて表明することができた。しかし、ASDという物語に安住できたわけではなく、「それが私を語るのか、と思うと複雑な気分」と、やりきれない様な思いも同時に抱えていく。そこで、Aさんは、「自分を知っていく」作業を通して、ASDと「自分」との折り合い方を模索していた。

上述してきたことを総合すると、ASD当事者にとって、診断を受けることや障害者手帳を受け取ることは、社会からの承認を体験することではないかと考える。「なんだ私だけじゃなくて、少数のグループでいるんだって、その中の1パターンなんだってわかったらすごく安心したんですね。(D)」、「自分が今まで生きてて、よくわからない理由の混乱が整ったことで、これでちょっと生きていけるんじゃないかって。自分が何者かやっこわかったって感じ。(F)」との語りがある。これらの語りからも、これまでの「自分」の苦悩を、社会から事実として認めてもらう安堵と、「自分」の体験への理解の拠り所を得た安堵が読み取れる。

繰り返し述べてきたように、「自分」という意識の形成には、他者と意味世界を共有する体験が必須と考える。よって、『診断名が自分を説明してくれる』とは、社会と「自分」が、意味世界を共有する体験となり得るのではないか。そういった意味で、診断告知とは、ASD当事者の「自分」の形成に、欠かせない要素であるといえよう。

次に、こうした重要な契機における、支援のあり方を考えてみたい。研究2の協力者Aさんは、2度の診断告知を経験している。1度目は、休職願いの書類に記載された診断名をたまたま見たことで、「なんとなく知った」との印象であった。しかし、その後の5年間、うつを再発するまで、障害を認めるか否かでの「せめぎ合い」を体験する。5年という長い年月、Aさんが不安

や混乱，そして心細さの中を過ごしたことが想像される。この様に，Aさんは，1度目の診断では，〈調整のサイクル〉を巡らすことができず、『診断名が自分を説明してくれる』安堵を体験できなかった。逆に，「頑張れば普通になるんじゃないか」との思いに駆られて〈苦悶のサイクル〉を巡らせ続けた。

当時のAさんに，どのような支援が必要だったのか。そのヒントは，研究1の協力者Iさんの語りの中にみられる。Iさんは，診断告知後，「本を読んだんですが，ここに自分はいないと思いました。僕のことを書かれているのではなくて，定型化されている」と感じたという。この語りには，世界にたった一人の「自分」が，十把一絡げの名前で呼ばれるという，戸惑いや悲しさが表現される。しかし，「一緒に頑張らしましょうねとか，こういう可能性ありますよとか。…KDrが居て僕が居てということだと，何か戦略がちょっと違ったりとか，気持ちが違ったりとかしましたね。…何か確実に違いました。(I)」と，Iさんの傍らには，「一緒に頑張らしましょうね」と声を掛けるK医師の存在があったことが語られた。

この様に，AさんとIさんの例を参考にすると，診断告知が〈調整のサイクル〉を巡る契機となるには，診断名がわかるだけでは不十分だといえる。そこには，共に考えようとする，生身の他者の媒介が必須だといえる。

こうした視点から，改めて振り返ってみると，Aさんの2回目の診断以降は，筆者が相談員としてAさんの傍らにいた。筆者との相談関係は，Aさんの〈調整のサイクル〉が巡る，一要素として機能していた，と考えることができる。

診断告知は，他者との繋がりが育まれるか否かの要でもある。だからこそ，ASDの成人当事者が，「パーソナリティ (personnalité)」(Wallon, 1952, 1956a) を発展させる，重要な契機となり得る。支援者は，診断告知という体験が，ASD当事者にとって温かな体験となるよう，慎重に対応する必要があるといえる。

③ 他者との出会い，「自分」との出会い

上述した様に，『診断名が自分を説明してくれる』という，社会からの承認は，生身の身体を持つ『他者に存在を受け止められる』ことで，より重要な要素となり得ていた。さらに，〈調整のサイクル〉を動かす要素として注目されたのは，『似た体験の他者と分かち合う』，『似た体験の他者が鏡になる』という，互恵的な関わりの体験である。

この関わり合いが，当事者にとって，どのような意味を持って機能しているのかを調べるべく，研究3では，ピア同士の出会いと，身体性の繋がりに焦点をあてた。身体性の繋がりを捉えるため，トーマスの共有と変化(森岡，2002)という概念を導入した。さらに，トーマスの共有と変化(森岡，2002)が，音声や言語として表出されたやりとりとして，「なぞりの呼応」(尼ヶ崎，1990)に着目した。

分析の結果，ピア同士の「対話」には，「馴染む」，「ずれる」，「ずらす」，というやり取りがなされていることが示された。「馴染む」体験は，他者と意味世界を共有し，「自分」という意識の形成の基盤となる体験となっていると捉えられた。そして，「ずれる」，「ずらす」という変化は，他者の心身態勢を「自分」に取り込み，出来事に対してより柔軟な構えが「自分」の中につくられていく体験と理解できた。この様に，似た体験を持つ生身の他者との間には，能動－受動のやりとりである，「自他二重性」(浜田，1992)が展開されていた。また，こうした似た体験を持つ生身の他者とのやりとりが「自分」の内側で続いていき，日常の出来事に対峙する支えとなっていることが示された。これらのことから，ASDの成人当事者は，グループという

場を苗床にして、「自我二重性」(浜田, 1992), すなわち「自分」という意識をより確かなものにしていくと考察された。

小林(2000)は, ASDの早期治療としてMIUを実践してきた。小林(2000)は, 原初的な対人関係である, 子どもと養育者の間で, 体験の意味を共有し, 子どもが「自分」という意識を育んでいけるよう促す実践を報告した。しかし, 小林(2000)の実践は, 子どもと養育者の間の関係に留まらず, 他者との出会いや繋がり意識を高める, 積極的な実践方法として示唆深い。よって, ASDのピア同士の関わり合いの意味を捉える, 糸口になると筆者は捉えてきた。ピア・サポートという場が, 守られた場であることを前提に, 彼らは, 他者と出会い, あるいは出会い直し, 互惠関係の中で「馴染む」, 「ずれる」, 「ずらす」体験を積み重ねていた。そこに, 原初的な対人関係を体験し直しつつ, 今を生きる「自分」を育む過程があると考察する。

こうした, ピア・サポートが展開する場を提供することが, 重要な支援策の一つになるということは, 改めて提言できることである。

一方, 支援の場において, 対象者と支援者が純粋な互惠関係を築くことには, 構造上難しい面がある。また, 支援の場で, そうした関係性を築くことは, 対象者にとって良い影響ばかりとは言えないだろう。しかし, ASD当事者への治療や心理的援助の中に, 研究3から導出された, 「馴染む」, 「ずれる」, 「ずらす」という, ピア同士の「対話」の要素を取り入れていくことの効用については, 今後検討していく意義がある。

青年期から中年期を生きるASD当事者が, 「自分」を育み, 「パーソナリティ (personnalité)」(Wallon, 1952, 1956a) を発展させていける可能性は十分にある。また, 「パーソナリティ (personnalité)」(Wallon, 1952, 1956a) の発展と共に, 「自分」という意識は変化していくと考える。一方で, 〈抱えてきた自分〉をもう一度抱え直す作業は, 他者との共同の中で続けられていくことが考察された。

(4) 筆者が「対話」から得たもの

“apprivoiser” すなわち「絆を創る」(小島, 2006) こととは, 『星の王子さま』の狐が言うように「肝心なこと」ではあるが, 「目には見えない」(倉橋, 2005)。調査を行い, 協力者の語りを, よりリッチなデータにするには, この「目には見えない」絆を結ぶための, 工夫と配慮が必要だったといえる。そして狐は, 「あんたのバラがあんたにとって大切なものになるのは, そのバラのためにあんたがかけた時間のためだ」(倉橋, 2005) という。協力者の語りを価値あるデータにするのは, その調査に, 自身の人生の時間を費やす, 調査者の覚悟が重要だと考える。つまり, 協力者を“apprivoiser”の対象として, 調査者の自己を深く関わらせていく共同作業が必須だと考える。そのため, 北大教育臨床心理学研究グループのゼミでは, 研究の必然性を研究者自身の自己に問う事が行われてきた。研究者の中で, 研究に対して, こうしたメタ的な認識が曖昧であると, 調査中協力者との「対話」は成立しえないだろう。

“apprivoiser”とは結局何か。それは, 「自分」という意識を成立させる, 「内なる他者」(Wallon, 1956b) との離れがたい関係と言い換えることができるのではないか。同時に, 「自分」もまた, 他者が「自分」を成立させるのに不可欠な, 内なる対話の相手となっている可能性がある。筆者は現在も, 研究3のフィールドとなったセルフヘルプ・グループに参加し続けている。グループが存続するかぎり, 参加する覚悟である。筆者が「対話」から得たものとは, そうした覚悟を含む, 「自分」という意識かもしれない。

6. おわりに ―謝辞に代えて―

『星の王子さま』の中で、王子さまと狐の間に結ばれた“apprivoiser”は、王子さまにいくつかの重要な気づきをもたらした。それは、王子さまが星に残してきた花に対する、「自分」の思いであり、狐と別れる寂しさという、「自分」の感情への気づきであった。狐は、王子さまに気づきをもたらす重要な他者となった。

春に、夏に、秋に、冬に、間宮教授は、筆者の論文指導に、多くの時間を使って下さった。誤字脱字以外、滅多に、教えない指導スタイルだった。しかし、様々な例え話や、間宮教授ご自身が体験されたエピソードを話して聞かせ、筆者にも、体験や考えを大いに述べさせた。間宮教授は、筆者がどのような話をしても、耳を傾けて聞いて下さり、他愛のない話に、意味を添えられた。そうして思考を伝授して下さい。博士学位論文が完成し、学位を取得した時、間宮教授は筆者にこう言われた。「これからは、この論文を読んでもらえる人格をもって下さい。木谷さんの書いた文章だから最後まで読もう、と思ってもらえる人に成って下さい。」

間宮教授がそうであった様に、関わる人々と“apprivoiser”の関係を築き、今後筆者が重要な他者として機能していくことを期待されたと理解している。

「…すなわち“apprivoiser”，時間をかけながら、手なづけていながら、なじませ、仲良しの関係をつくるということ、このことは、私たちの教育臨床の実践において、どういうふうに生かされると考えますか。」（試験問題より）

正解は多様であろう。解答する「あなた」には何ができるのかを問うている。筆者は現在、学校という場所で、「生きることの困難をかかえる子どもたち」（間宮、2018）と関わる仕事を得ている。知識、技術もさることながら、問われるのはいつも、その場に関わる瞬時の「自分」の姿勢である。そうした「自分」は、間宮教授はじめ、調査を通して関わって頂いた協力者の方々、これまで関わって頂いた多くの方々等、重要な他者との関わりの中で形成された「自分」だと考える。

博士学位論文として、一つの有形物として、研究成果をまとめられたことと共に、博士学位論文作成を通して得られた、多くの方々との「対話」という、無形の恩恵に感謝したい。北大教育臨床心理学は、「対話」を通して、臨床に携わる人の自己を育てる学問だと筆者は理解する。

引用文献

尼ヶ崎彬（1990）：ことばと身体 頸草書房。

Asperger, H. (1944) : Die 'autistischen Psychopathen' im Kindesalter. Archiv. für Psychiatrie und Nervenkrankheiten, 117, 76-136. 詫摩武元・高木隆郎（訳）（2000）：小児期の自閉的精神病質 高木隆郎・マイケル・ラター・エリック・ショプラー（編） 自閉症と発達障害研究の進歩2000/Vol.4 2章 星和書店 30-68.

浜田寿美男（編）（1992）：〈私〉というもののなりたち ミネルヴァ書房。

浜田寿美男（1994）：ピアジェとワロン ミネルヴァ書房

- 平野郁子 (2014) : 発達障害のある人が障害者手帳をもって生きる体験－青年期以降に診断を受けた取得者へのインタビューから 北海道大学大学院教育学研究院紀要 120, 1-22.
- 広沢正孝 (2016) : 中年期の自閉スペクトラム症者 精神医学 58(5), 399-406.
- Kanner, L. (1943) : Autistic disturbances of affective contact. *The Nervous Child*, 2, 217-250. 十亀史郎・斎藤聡明・岩本憲 (訳) (1978) : 情動的交流の自閉的障害 レオ・カナー (著)
- 十亀史郎・斎藤聡明・岩本憲 (訳) 幼児自閉症の研究 1章 黎明書房 10-55.
- 亀井菜月・武内珠美・佐藤晋治 (2011) : 高機能広汎性発達障害者の自己理解の心理的プロセスと理解・対応に関する研究－当事者の自伝分析から 大分大学教育福祉科学部附属教育実践総合センター紀要 29, 29-43.
- 木下康仁 (2003) : グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践－質的研究への誘い 弘文堂.
- 木谷岐子 (2015) : 自閉症スペクトラム障害の成人当事者が抱える「自分」－M-GTAを用いた質的研究－ 北海道大学大学院教育学研究院紀要 122, 1-25.
- 木谷岐子 (2016) : 自閉症スペクトラム障害の一女性が語るライフストーリー－「自分」への苦悩に焦点をあてて－ 人間性心理学研究 34(1), 61-71.
- 木谷岐子 (2017) : 体験としての自閉症スペクトラム障害－成人期を生きる当事者の「パーソナリティ (personnalité)」の発展に着目して－ 北海道大学大学院教育学院 博士学位論文 (<http://doi.org/10.14943/doctoral.k12747>).
- 小林隆児 (1999) : 自閉症の発達精神病理と治療 岩崎学術出版社.
- 小林隆児 (2000) : 自閉症の関係障害臨床－母と子のあいだを治療する ミネルヴァ書房.
- 越川房子 (1999) : 自己 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁樹算男・立花政夫・箱田裕司 (編) 心理学辞典 有斐閣 323-324.
- 小島俊明 (2006) : 星の王子さまのプレゼント 中公文庫.
- 倉橋由美子訳 (2005) : 新訳 星の王子さま 宝島社.
- 桑原齊 (2014) : 医学的見方から－ASDの診断基準 心理学ワールド 67, 5-8.
- Lee, A. & Hobson, R. P. (1998) : On developing self-concept ; A controlled study of children and adolescents with autism. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 39(8), 1131-1144. 岡田俊 (訳) (2000) : 自閉症児の自己概念の発達 高木隆郎・マイケル・ラター・エリック・ジョブラー (編) 自閉症と発達障害研究の進歩2000 / Vol.4. 星和書店 263-284.
- 間宮正幸 (2018) : 時代に応える臨床心理発達相談－日本の先達、城戸・留岡・奥田からの伝言－ 子ども発達臨床研究 11, 45-55.
- 間宮正幸・俵谷知美 (2011) : 成人後の「診断・告知」とその人の理解 田中康雄 (編) 発達障害は生きづらさをつくりだすのか－現場からの報告と実践のための提言 金子書房 125-143.
- 文部科学省 (2007) : 「発達障害」の用語の使用について 文部科学省ホームページ (http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/main/002.htm).
- 森岡正芳 (2002) : 物語としての面接－ミメシスと自己の変容 新曜社.
- 村田豊久 (2016) : 新訂 自閉症 日本評論社.
- ニキリンコ (2002) : 所属変更あるいは汚名返上としての中途診断－一人がラベルを求めるとき 石川准・倉本智明 (編) 障害学の主張 明石書店 175-222.
- 野村香代・別府哲 (2005) : 高機能自閉症児における自己概念の発達 日本特殊教育学会 第43回大会発表論文集, 406.
- 佐藤由宇・櫻井未央 (2010) : 広汎性発達障害者の自伝に見られる自己の様相発達心理学研究 21(2), 147-157.
- 杉山登志郎 (1992) : 自閉症の内的世界 精神医学 34(6), 570-584.

- 杉山登志郎 (1994) : 自閉症に見られる特異な記憶想起現象－自閉症のtime slip現象 精神神経学雑誌 96(4), 281-297.
- 杉山登志郎 (2000) : 軽度発達障害 発達障害研究 21(4), 241-251.
- 杉山登志郎 (2008) : 成人期のアスペルガー症候群 精神医学 50(7), 653-659.
- 杉山登志郎・末田佳代・西沢めぐ美・多田早織・辻井正次 (1998) : 高機能広汎性発達障害青年の手記の分析 乳幼児医学・心理学研究 7(1), 41-49.
- 滝吉美知香・田中真理 (2011) : 思春期・青年期の広汎性発達障害者における自己理解 発達心理学研究 22(3), 215-227.
- 田中千穂子 (編著) (2009) : 発達障害の理解と対応－心理臨床の視点から 金子書房.
- 田中康雄 (2008) : 軽度発達障害－繋がりがあって生きる 金剛出版.
- 俵谷知美 (2008) : 広汎性発達障害のある人が「私」をわかること－成人期に診断を受けた方へのインタビュー調査より(1) 第49回日本児童青年精神医学会総会抄録集 257.
- 上田敏 (1981) : リハビリテーション医学の位置づけ－リハビリテーションの理念とリハビリテーション医学の特質 医学のあゆみ 116(5), 241-253.
- Wallon, H. (1934/1948) : Les origines du caractère chez l'enfant : Les préludes du sentiment de personnalité. Bolvin. ; 2^e ed., P.U.F. 久保田正人 (訳) (1965) : 児童における性格の起源 明治図書.
- Wallon, H. (1938) : Rapports affectifs: les émotions., H. Wallon (ed.) La vie mentale. Vol.VIII de《L'encyclopédie Française》. 情意的関係－情動について 浜田寿美男 (訳編) ワロン/身体・自我・社会 第1部 ミネルヴァ書房 149-182.
- Wallon, H. (1946) : Le rôle de《l'autre》 dans la conscience du《moi》. Journal Egyptien Psychol.2, 1.; reed. In Enfance, 1959, 3-4. 279-286. 浜田寿美男・谷村覚共訳 (1983) : 「自我」意識のなかで「他者」はどういう役割を果たしているか 浜田寿美男 (訳編) ワロン/身体・自我・社会 第1部 ミネルヴァ書房 52-72.
- Wallon, H. (1952) : Les étapes de la sociabilité chez l'enfant. L'École Librée. 浜田寿美男訳 (1983) : 子どもにおける社会性の発達段階 浜田寿美男 (訳編) ワロン/身体・自我・社会 第1部 ミネルヴァ書房 73-103.
- Wallon, H. (1956a) : Les étapes de la personnalité chez l'enfant. Le problème des stades en psychologie de l'enfant. Paris, P.U.F. 浜田寿美男訳 (1983) : 子どもにおけるパーソナリティの発達段階 浜田寿美男 (訳編) ワロン/身体・自我・社会 第3部 ミネルヴァ書房 231-244.
- Wallon, H. (1956b) : Importance du mouvement dans le développement psychologique de l'enfant., Enfance. 浜田寿美男訳 (1983) : 子どもの精神発達における運動の重要性 浜田寿美男 (訳編) ワロン/身体・自我・社会 第2部 ミネルヴァ書房 138-148.
- Williams, D. (1992) : Nobody Nowhere. London : Transworld Publishers. 河口万理子 (訳) (1993) : 自閉症だった私へ 新潮社.
- Wing, L. (1981) : Asperger's syndrome: A clinical account. Psychological Medicine, 11, 115-129. 詫摩武元・高木隆郎 (訳) (2000) : アスペルガー症候群：臨床知見 高木隆郎・マイケル・ラター・エリック・ショプラー (編) 自閉症と発達障害研究の進歩2000/Vol.4 7章 星和書店 102-120.
- やまだようこ (1987) : ことばの前のことば 新曜社.

**Drawing the Self Experiences of Individuals
with Autism Spectrum Disorder
— Focusing on using dialogue as research method —**

Michiko KIYA

Key Words

dialogue, autism spectrum disorders, internal experiences, self

Abstract

The author submitted a doctoral dissertation to Hokkaido University in March 2017. The author has positioned this doctor dissertation as one of the results of knowledge and technology cultivated by Hokkaido University Educational Clinical Psychology Course. In this research paper, I will examine how “apprivoiser”, that is, “creating knot” was made use of in my thesis dissertation. My doctor thesis attempt was to try to visualize autism spectrum disorders from the internal experiences of the parties. As a research method, the author asked the research collaborator to talk about the aspect of consciousness of “myself” by “dialogue”. I reconsidered the idea and consideration I made. As a result of the examination, the author considered the attitude to deeply involve the investigator’s self to “dialogue” in order to capture the meaning of the narrative of the research collaborator.